**ゴータマ・ブッダ**

2021年6月20日

逗子例会・シュリー・ブッダ生誕祭

スワーミー・ディッヴャーナターナンダによる講話

於・逗子本館よりライブストリーミング

「ブッダ」という言葉は「目覚めた人」または「悟った人」という意味です。世界の多くの人々の人生に影響を与えた東洋の最も偉大な預言者の一人であるゴータマ・ブッダは、シュッドーダナ王とそのお妃マーヤー・デーヴィーの間にシッダールタとして生を受けました。シュッドーダナはカピラヴァストゥ国のシャーキヤ族（釈迦族）の王でした。世界の師の生誕は一般的な現象ではありません。他の預言者の生涯と同じように、ブッダの両親は偉大な預言者が家族としてやってきたことについて、超自然的なヴィジョンを見ました。ブッダの生誕以前にも、マーヤー・デーヴィーは白い象が自分の身体の中に入るヴィジョンを見ました。そのヴィジョンのすぐ後に彼女は赤ちゃんを宿しました。そしてある日、彼女の生まれ故郷の村ルンビニに行く道中でゴータマが生まれました。

**神の計画**

ある占星術師が、若いゴータマが世俗の世界に残れば偉大な王に成長するだろう、しかしもし彼が宮殿の快適さを棄てるなら、偉大な賢者、人類の救世主になるだろうと予言しました。生まれてから7日間のうちに母マーヤー・デーヴィーが亡くなったので、ブッダはその妹ゴータミに育てられました。父親であるシュッドーダナは占星術師の預言を心配しました。シュッドーダナ王は息子の生活を可能な限り快適で楽しいものにしようとしました。なぜならゴータマは人間の苦しみを経験することでこの世を放棄するかもしれない、と恐れたからです。そのためにシュッドーダナ王はゴータマを美しく若い女性のヤショーダラーと結婚させました。

しかし、神のご計画は王のものとは違っていました。ゴータマは生まれつき思慮深く、幼少期の母親の死はすでに彼の心に空虚感をいだかせていました。ゴータマは、自分はあらゆる種類の快適さと楽しみに囲まれているがこの世のすべての幸せは一時的なものではないのか、それとも永遠の至福を与えてくれるのだろうか、としばしば熟考を重ねました。ある日、御者であるチャンダカとともに、二人は馬車に乗り宮殿の城壁の外に思い切って出かけました。ゴータマはその時初めて、杖に頼ってよたよた歩く老人を見ました。「チャンダカよ、彼は誰か」とシッダールタ王子は尋ねました。

「彼は老人でございます。私たちはみな、いつかは老いるのです」とチャンダカは言いました。

しばらく行くと若い王子は、がりがりに痩せ悲惨なようすで力なく突っ伏しているもう一人の男を見ました。「チャンダカよ、なぜ彼はこんなところで横になっているのだい？」

「あの男は病気でございます。誰もが病気になる可能性があります」とチャンダカは答えました。

それからゴータマはまたべつの男の身体を見ました。その身体は生きているようには見えませんでした。数名の男たちがその身体を肩に担いで運んでいました。チャンダカは説明しました。

「肩に担がれているのは死人でございます。人間は誰しもいつかは死ぬ運命です。彼の肉体は火葬するために運ばれているのです」

最後にゴータマは神々しい顔をした黄土色の衣をまとった人がお椀をもって下を見ながら歩いているのを見ました。チャンダカは言いました。「この人は出家者でございます。彼は生死を超越するために人生の快適さを放棄しております」

**王子、家を棄てる**

この三つの光景はゴータマに深い印象を残しました。出家者の光景は彼の心に放棄という考えを起こさせました。ゴータマが宮殿に戻る途中、彼は息子が生まれた知らせを受けました。このことは彼の思慮のターニングポイントとなりました。彼は自分の人生にさらなる束縛ができたと結論づけ、密かに宮殿を去ることにしたのです。

チャンダカを含む五名の従者は、ゴータマの信者となるために一緒に出掛けた、と言われています。まずゴータマは当時の数名の大師の許へ行き、その指導の下で霊的な実践をしましたが、彼らの教えでは自分の渇きをいやすことはできませんでした。最後に彼は自力で真理を悟ろうと、瞑想と厳しい苦行をしました。ゴータマは六年間厳しい修行をしましたが、まだ目標を達成していませんでした。彼の身体はひどく痩せこけてやつれていました。ある日、スジャータという地元の村の乙女がゴータマにミルク粥をお供えしました。スジャータがお供えした食べ物を食べると、ゴータマはエネルギーを取り戻し、再び最高の霊性の知識を得ようと決意しました。そしてついに三十五歳の恵まれた日に彼は悟りを得て、ブッダとなったのです。ブッダとなった彼は、すべての人間の苦しみが消え、喜び、痛み、幸福、悲しみにも影響されない心の状態に達しました。

**四つの聖なる真理　（四諦）**

そして苦しんでいる人びとに対する思いやりから、ブッダはすべての人のためにご自身が得た知識を説くことを熱望しました。ブッダは、ご自身が乙女からのミルクを受け取ったことから、かつてブッダの許を去った5人の弟子のところへ行きました。弟子たちはブッダが話されるのを聞いて、ブッダが非常に高い状態に達したと確信し、再びブッダを師として受け入れ、改めて弟子になりました。ブッダはダルマ、つまり四つの聖なる真理（四諦）を彼らに説きました。それはベナレスの近くのサルナートでのことでした。

輝かしい状態の中で、ブッダはこの『四諦』を悟りました：

・第一の真理（苦諦）

人間の生命は苦しみに満ちている。 生まれてから死ぬまで、人間はさまざまな形で苦しみを受ける。

・第二の真理（集諦）

これらの苦しみの背後には原因がある。トリシュナ、世俗の楽しみに対する渇愛（渇きや欲望）が苦しみの原因である。

・第三の真理（滅諦）

私たちの苦しみは終わらせることができる。すべての欲望を放棄することで可能となる。

・第四の真理（道諦）

欲望が滅びたときに人は悟りを得て、すべての苦しみは止む。極端な苦行は必要なく、贅沢に溺れてもいけない。それよりも中道を歩むこと。中道が人の欲望の終焉へと導く。

**平和に伝道する**

ブッダがラージグリハ国の町へ行くと、ビンビサーラ王から温かな歓迎を受けました。ブッダがラージグリハ国からコサラ国へと移ると、コサラ国のプラセナジト王はブッダの弟子となりました。ブッダは父であるシュッドーダナ王が治めるカピラヴァストゥ国へと向かいました。そしてブッダの家族は妻も息子もみな、ブッダの信者になりました。

45年間、ブッダは弟子たちと共に教えを説くために諸国を行脚しました。王様、偉大な学者、そして庶民が同じようにブッダの信者となりました。さらには残虐な盗賊アングリマーラや遊女アンバパーリーも彼の御足に平伏し、彼の教えを受け入れました。

ブッダの生涯と教えの特徴の一つは、ブッダは、神、預言者、救世主について説かなかったことです。ブッダの教えでは、宗教の正当性や儀式にはあまり価値を置かず、その代わりに倫理［人として守り行うべき道］を強調しました。そしてまた仏教は、ゆっくりと、力づくで改宗させることなく、広がっていきました。仏教はどこにおいても平和の旗の下で大きくなったのです。

ゴータマ・ブッダの生涯に関するいくつかの興味深い逸話があります。 それらはブッダの教えの偉大な智慧が反映されているので、ここでいくつかをご紹介します：

**みな必ず死ぬ**

ブッダがあるところで弟子たちに囲まれて休んでいると、悲しみに打ちひしがれた女性がブッダに会いたいと言って近づいてきました。彼女はたった一人の子供を亡くし、ブッダの祝福を求めて彼のもとへやってきたのです。その女性はキサー・ゴータミーという名前でした。その頃にはブッダの名声は遠く広がっていました。キサー・ゴータミーは、亡くした子供を生き返らせる力がブッダにはある、と信じ込んでいました。最初ブッダは彼女の悲しみを和らげてから、生きている者は遅かれ早かれいつかはみな死ななければならないことを納得させようとしました。しかし、キサー・ゴータミーはブッダの力を信じていたので簡単にはブッダの許から離れることはできませんでした。

　「分かりました」とブッダは言いました、「どの家からでもいいので一握りの辛子粒を持ってきてください」。　それを聞いたガウタミは、おそらくブッダは辛子粒を子の身体に振りかけ、ブッダの力でその子が生き返るのだろう、と思って喜びました。ブッダは続けました「しかし」、「これまでに死者の出たことのない家から集めてきてください」　ガウタミは必死に家々をまわり、死が一度も入ったことがない家を探しましたが、そんな家はどこにもありませんでした。次第に彼女は息子がもう自分の許へは戻ってこないことに気づき始めました。生の厳しい真実が分かり始めました。ブッダはガウタミに、生あるものは必ず死ぬということを理解させたかったのです。

**大事なことと大事でないこと**

多くの場合、私たちは大事なこととそうでないことを混同し、大事でないことが自分にとってより重要であると思うこともあります。大事なことにフォーカスすることの重要性を分からせるために、ブッダは次のような逸話を語りました：

・毒矢に刺されたとします。そのときあなたは矢を放ったのが男か女かを見極めることから始めますか？　誰がその矢を放ったのか？　矢の毒の成分は何か？　矢を放った弓は竹製かそれとも木製か？　もし矢を受けたときにそのようなピント外れのことから探し始めれば、もっと具合が悪くなるだけです。賢い人は無意味な議論を追求する代わりにまず矢を抜き、傷口を治すために必要な薬を探します。

同じように、私達も自分の人生において苦しみがあることを認めましょう。そしてその苦しみの原因とそれに対する対処法を見つけるのです。

**農夫ブッダ**

・ある日、ブッダが托鉢に出かけると、豪農バーラドヴァージャに出くわしたので施しを乞いました。バーラドヴァージャは托鉢をしている者を見てあまり喜ばず言いました、「私は農民です。肥沃な土地に種をまき、良い収穫をしています。あなたも私と同じように農業で生計を立てれば托鉢に出る必要はなくなります」。

　ブッダは答えました「私も農夫です。信仰という種をまきます。良い行いが肥料となる雨です。智慧と慎み深さが私の鋤です。心が手綱です。私は法というハンドルを握っています。熱心さが鍬棒です。努力が荷車用雄牛です。これらで幻想という雑草をなくすために耕します。収穫はニルヴァーナの不滅の果実で、そこですべての悲しみは終わります」。　その智慧に満ちた言葉を聞いて、バーラドヴァージャは金の鉢にミルク粥を入れてブッダに捧げました。

**ブッダ、戦争を防ぐ**

・ある時ブッダは二つの隣接する王国が、土手の所有権のことで戦争の危機に瀕していることを知りました。ブッダが到着したとき、両国はすでに臨戦態勢に入っていました。ブッダは尋ねました。「この土手には内在する価値があるのですか、あなたの家来の役立つ奉仕よりも？」

「いいえ、それには内在する価値はございません」という答えが返ってきました。

「そうなんですか？　戦争が勃発すれば多くの人が死に、あなたたち王もまた死ぬかもしれないのですよ」

「はい、そうかもしれません。戦争では多くの人が殺されるでしょう」

「人の命よりもこの土手が大事なのですか？」

「おっしゃるとおりです」

「そうであれば、この戦争はやめた方がいいのではないですか？」とブッダは尋ねました。

すぐにどちらの当事者も自分の過ちに気づき、戦争は回避されました。

**識別の訓練**

・ある時、肥満で病気がちの金持ちの男がブッダのもとにやってきて言いました。偉大なお方様、どうかちゃんと敬礼できないことをお許しください。私はいろいろな病気で苦しんでいます。私はこの状態から回復したいので、どうすればいいか教えてください。

「食べすぎ、寝すぎ、働かないことが肥満の原因です」とブッダは言いました。「もしあなたが本当に回復したいのなら、食欲を抑制し、睡眠を減らし、身体を使う仕事を始めなさい」

金持ちの男はブッダの教えに従って、肥満から回復しました。男がブッダにもう一度会うためにやってきて言いました。「偉大なお方、あなたは私を身体的な病気からお救いくださいました。どうぞ私の心を世俗から解放してください」

ブッダは言いました。「世俗的な人は肉体に栄養を与えるが、思慮深い人は心に栄養を与えます。贅沢にふける人は自己を破壊しているようなものです。識別を働かせなさい」

**誠実で正しい使い方**

・ウダヤナ王の妃シャマヴァティーが五百着の衣をアーナンダ（ブッダのお気に入りの弟子）に供養したとき、アーナンダはこれを快く受け入れました。これを聞いたウダヤナ王は、アーナンダが不誠実なのではあるまいかと疑いました。王はアーナンダを訪ねて聞きました。「五百着の衣を一度に受けとってどうされるのですか？」

アーナンダは答えました。「多くの兄弟弟子はぼろ布を身にまとっているので、この衣を分けます」

「それではこれまでの布はどうしますか？」

「敷布を作ります」

「古い敷布はどうしますか？」

「枕カバーにします」

「古い枕カバーはどうしますか？」

「床の敷物に使います」

「古い床の敷物はどうしますか？」

「足ふきを作ります」

「古い足ふきはどうしますか？」

「雑巾にします」

このようにアーナンダは全く不誠実ではないことが証明されました。

**ブッダに関するヴィヴェーカーナンダの言葉**

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはブッダを非常に崇敬していました。1900年3月18日、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはサンフランシスコでゴータマ・ブッダに関する演説をしました。それは後に『ブッダの世界へのメッセージ』としてスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのコンプリート・ワークスに収められました。

・ヴィヴェーカーナンダは言いました。「私はずっとブッダのことが大変好きでした。その大胆さ、その恐れのなさ、その途方もない愛、という性質において他の誰よりも崇敬しています！　彼は人々への善のために生まれました。自己のために神を求める者、真理を求める者はいます。しかしブッダは自分のために真理を知ることなど気にもかけませんでした。彼は人々が悲惨な状態にあったから真理を探究したのです。どうやって人々を救済するか、それだけを思っていました。ブッダは生涯を通して自分のことを一顧だにしませんでした。無知で利己的で狭い心を持つ人間がはたしてブッダの偉大さを理解できるでしょうか？」

**仏教の特徴**

ゴータマ・ブッダが創設した仏教は、世界の主な宗教の一つです。インドで始まりましたが、さまざまな大陸にその翼を広げてきました。仏教がこれまで繁栄し続けてきた理由の一つは、その合理的で実践的な道とシンプルさからです。仏教は特定の神様を重視するのではなく、識別を通して自分の苦しみを取り除くことでニルヴァーナに到達するように信者に助言しています。

仏教は全く盲信的ではありません。国から国へと広がりを見せる時も、主ブッダの名のもとに血が流されることは全くありませんでした。アルダス・ハクスレーは記しました。「世界のすべての偉大な宗教の中で、仏教だけが、迫害、弾圧、宗教裁判をせずに道を作りました」

仏教では、カーストで制約される場所はありません。ブッダの指示により、虐げられた低いカーストの人々は、王や君主と同等の地位と権利を見いだしました。また、仏教では女性の状態も改善されました。ブッダは尼僧の僧団を設立し、生活がうまくいくように、適切なルールや規定を設けました。なぜならブッダは人の性別が霊性の発展の障害になるとは考えなかったからです。

以上、仏教のおもな特徴の一部をご紹介しました。